

「ボールを蹴る」「字を書く」など協調運動に係る困難

書字がマスに入らない、文字のバランスが整わない状態の子どもについて、発達性ディスレクシアと混同しやすい障がいに、発達性協調運動障がいがあります。これは筋肉や神経、視覚・聴覚などに異常がないにもかかわらず、「ボールを蹴る」「字を書く」などの協調運動に困難を呈するものです。

この障がいのある子どもは、いわゆる「不器用な子」「運動が苦手な子」として見られ、学業成績に影響が及びます。また、同世代の子どもとの遊びについていけないといった社会的な困難も生じます。症状の程度によっては、社会生活への適応を促すための生活技能訓練が必要になります。

出現率は、1クラスに3～4人

この障がいが見れる割合は、6～10%と言われており、1クラスに3～4人在籍していると考えられます。走ったり跳んだりといった全身運動(粗大運動)、文字を書いたり、はさみを使ったりボタンを留めたりといった手先の運動(微細運動)、スキップをしたり縄跳びをしたり楽器を演奏するなどの組み合わせ運動(構成行為)に、単独であるいは複数の困難が生じます。

実際に通常学級の先生方に意見を聞くと、「協調運動のつまずきが気になる児童・生徒はいる」という回答が多く聞かれます。ところが、この診断名を知らない教員は、まだまだたくさんいるのが現状です。運動のつまずきは、学校生活全般に影響することが考えられることから、子どもたちの支援を考えていくには、とても大切な視点のはずが、残念ながら見落とされてしまうことがあります。

映画「ハリー・ポッター」シリーズの主演俳優ダニエル・ラドクリフは、この障がいを持っており、インタビューに答えて、靴ひもが結べず苦しんだことをはじめ、学校では何をやってもうまくいかないことが、とてもつらかったと明かしています。

簡単な課題からのスモールステップを、評価は焦らずポジティブに

不器用さからくる学習場面での問題は書字、図工、音楽などにもみられます。小学校低学年くらいまでは運動自体の困難に注目されがちですが、小学校高学年頃から思春期になると二次的な心理社会的問題が深刻になってきます。具体的には、自尊心の低下や消極的な態度、集団からの孤立などの問題です。これらは長期にわたる人格の形成にも影響することが考えられます。この問題を回避し、より豊かな生活を送るためには、個の不器用さに焦点を当てた発達支援が不可欠です。子どもの不器用さに対する理解を早い段階から深め、発達の視点から子どもにあった方法で支援していく必要があります。簡単な課題からのスモールステップを心がける、評価は焦らずポジティブに行う、活動の楽しさを味わえる魅力的な課題にする、自己達成感の向上を大切にする、活動に集中しやすい環境の工夫を行う、などです。これらの支援のポイントは、運動面に限らず、発達障がいのある子ども等への発達支援に必要なことでもあります。

<参考資料など>

国立特別支援教育総合研究所HP びわこ学院大学教育福祉学部スポーツ教育学科
藤井 茂樹氏 論文